

歎異抄講話 第九章 信と生活

第一節 二つの問題

「一。念仏もうしそふらえども、踊躍歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。」

念仏生活における二つの不審

第九章は、唯円房が、念仏生活の上において現れてくる二つの問題を提げて、師聖人に当たつていかれた、ありがたくもまた、すでに有名な一章であります。第二章とともに、念仏の腹底をたたいてその信念を示されたもので、全章中の双壁そうへきでありましょう。第二章は、念仏に対して絶対の随順、それより現れる不壞の信念を示されたものであり、この章は、念仏の生活における、自己の偽らざる真相、その内観の告白を通して本願への確信を述べられたものであります。

念仏生活において重んぜらるべきは、偽らざる己が心の真相の内観深信であります。興奮したのも自己の真相ではない、よそ行きに装われたものも、一時の出来心も、すべて真相ではない。私の真の相の偽わられている間、救いはわからない。如来の大悲は、偽装の中に流れてくださるのではない。偽らざる真実の業苦煩惱を転成して徳となしたものであります。いかなる悪業煩惱も、それ自体は本願大悲の前には熱に対する氷であります。悪業煩惱を悪業煩惱と知らせざる無自覚こそ問題であります。

唯円房は、忠実なる聞法者であり、真実なる念仏者であります。けつして念仏生活の上に現れてくる不審をそのままにしておくことはできない。彼はあるとき、胸中の不審を師の前に投げ出して、その解決を求めました。

「念仏もうしそふらえども」

唯円房は念仏申したのであります。何もなかつたのではない。また如来の本願の救いを危ぶんだのでもないのであります。念仏申せば申すほど、わが心に帰る。その時、そこに不審が起きてくるのであります。

「念仏まをしきふらへども、(1)踊躍歡喜のころ、おろそかにさふらふこと。また(2)いそぎ浄土へまいりたきころのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらん。」

すなわち、一つは歡喜の問題であり、一つは往生浄土への志の薄弱の問題であります。

聖人の態度

この唯円房の問いは、単なる概念の遊戯でなく、議論でもなく、忠実に自己を凝視みつめての、血のしたたる全我的な不審であります。この問いに対して、聖人は、

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房、おなじこころにてありけり。」とお答えになりました。これまさしく、師が弟子の心に同じられたのであります。弟子の懺愧を師の心の上に受け取られたのであります。

私どもは、ここにいろいろなことを頂きますが、その第一は、唯円房の問いが、本仏に対する根本的な疑惑ではなかったことでもあります。もし信疑に関する問題であるならば、なんで同じ心だと言われましょう。しかし、本願を信じて念仏申しつつも、まだ灰汁^{あく}ぬけのしない処がある。今もし「念仏は申しておりますが、どうしても、三毒煩惱がやみません。貪欲の心がますます増してきてどうすることもできませんが、いかなるわけでございましょうか」と問う人があっても、「親鸞、おなじこころにてありけり」と仰せになることでありましょう。それは、如来の智慧光に照らされてくれば、今まで見えなかつた心の真相が現れてくるからであります。この点から言えば、深く大信心海に呼吸する人ほど、深く内に煩惱の相を見出しているのであります。心の底に底を造ると、それからは、氷すべりのごとく横に歩みはじめます。芯のとまつた人であります。

聖人はこんな問題は通つてこられた問題であります。経には、聞其名号信心歓喜とあります。信心には歓喜が添う。それは事実であります。初めて、本願の真実にふれた時、正法が一切の疑惑と、憍慢と、邪見とを打つて、まさしく心の底に満入してくだされぬがごとく、ずっと相続してゆく間には、深まつては行つても、初めのごとき感激はなくなつて、じつとおちついたものになる。そして聞けば聞くだけ、喜ばば喜ばばほど、喜んでくれないものが見えてくる。喜ばば喜ばほど、喜ばないものが見えるとは妙であります。それがほのかに照らし出される煩惱の真相であります。

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房、おなじこころにてありけり。」

このお言葉を頂いた時、唯円房のお心はいかがでありましたでしょう。大きな驚きと、大きな慈愛と、光と、一度に得たことでありましょう。もしこの時、「唯円房、それでは駄目だ。信心は歓喜である、歓喜のない信心がなにになるか！」と仰せになつたとしたら、どうでありましょう。唯円房は、死の宣言にも等しく、闇の底につき落とされたことでありましょう。しかるに、「唯円よ、お前もそうであるか、この親鸞もお前と同じ心を持つているのだよ」とのご持言に、唯円房は感泣したことでありましょう。こうして、弟子の心に同じつつ聖人は、静かにこの不審を絶つてゆかれます。

第二節 信と歓喜

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきこころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」

道理と現実

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬ……………」

聖人は、信巻において、念仏の行者は、便同弥勒とて、菩薩の最高権威、五十一段の等正覚の位にあると言われる、補処ふしよの弥勒大士に、便同とせられました。真如一実の太行、如来のすべてである功德の大宝海を、此の身に帰入功德大宝海と満足せしめたものがお念仏の世界であります。であるがゆえに、正信偈には、「成等覚証大涅槃」と仰せられました。まことに生死流転の繫縛を聞信の一念に断じ、三世にわたる一大事を一念に決したのであります。でありますから、

「よくよく案じみれば、天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきこと」であります。「べきこと」であります。「よろこばぬにて」とは、現実の事実であります。べきこととは、道理であり、よろこばぬとは現実の事実であります。一は頭の世界であり、一つは胸の事実であります。われらはすべての世界において、この頭と胸との二つの世界を持つていて苦しむのではありますまいか。一人の篤志家があつて、河に危げな丸木橋を渡した時、人々は深い感謝をその人に捧げたそうであります。しかし後になつて、そこに道路が開かれ大きなコンクリートの橋ができて、楽に渡られるようになる、みな橋のあることさえ忘れて、感謝などは持つものがなくなつたということとあります。

万国無比の国土に今日も生きさせていただきながら、ご恩がわからず、感謝がなく、得手勝手ばかりを通そうとすること、情ないこととあります。道理を知る頭は、3どんな高い理想をでも視ることができ、しかも動いてくれないのが、この胸であります。このゆえに、真の忠臣は、かえつて不忠の己に泣き、真の孝子は、不孝のわれを痛むのであります。